

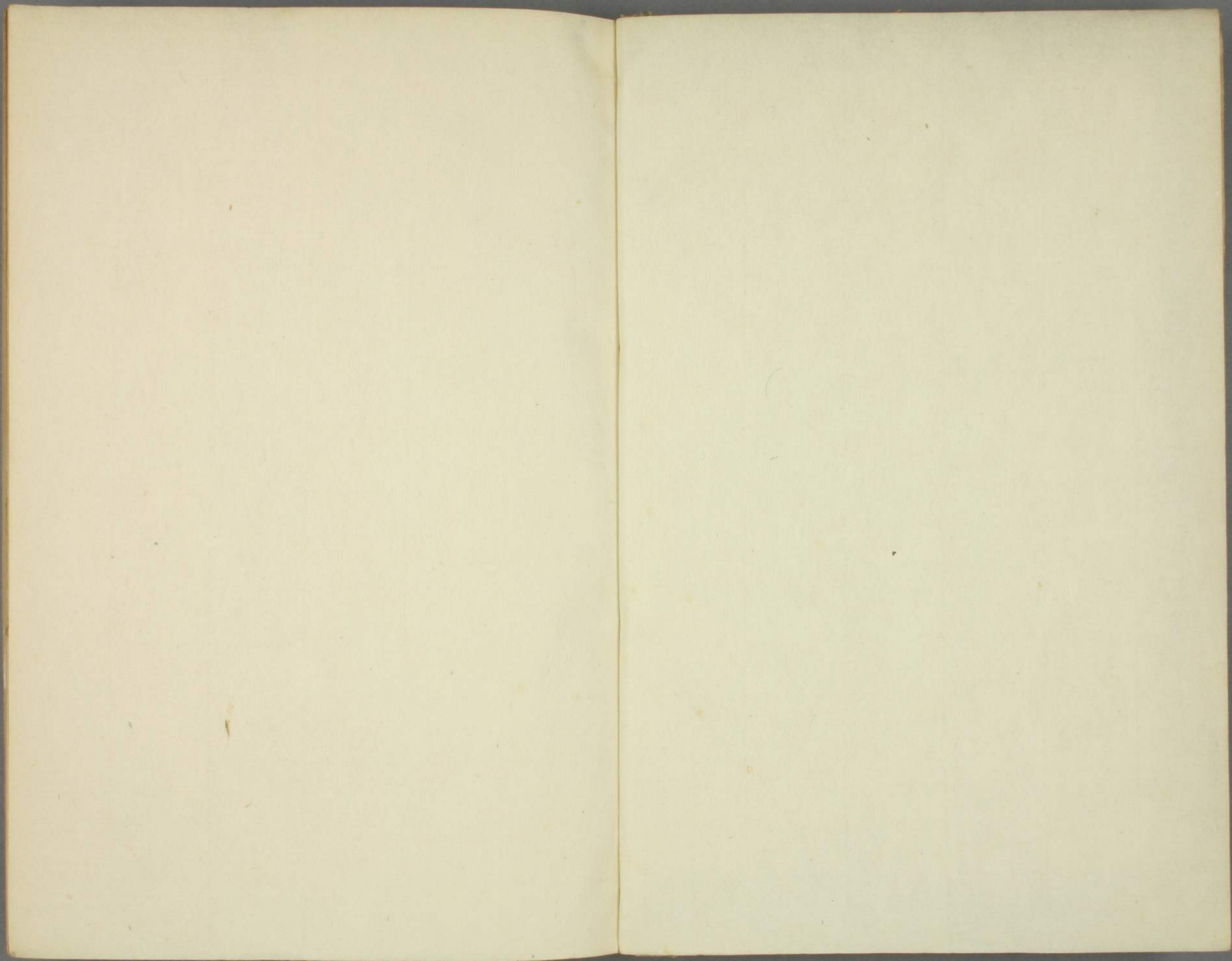


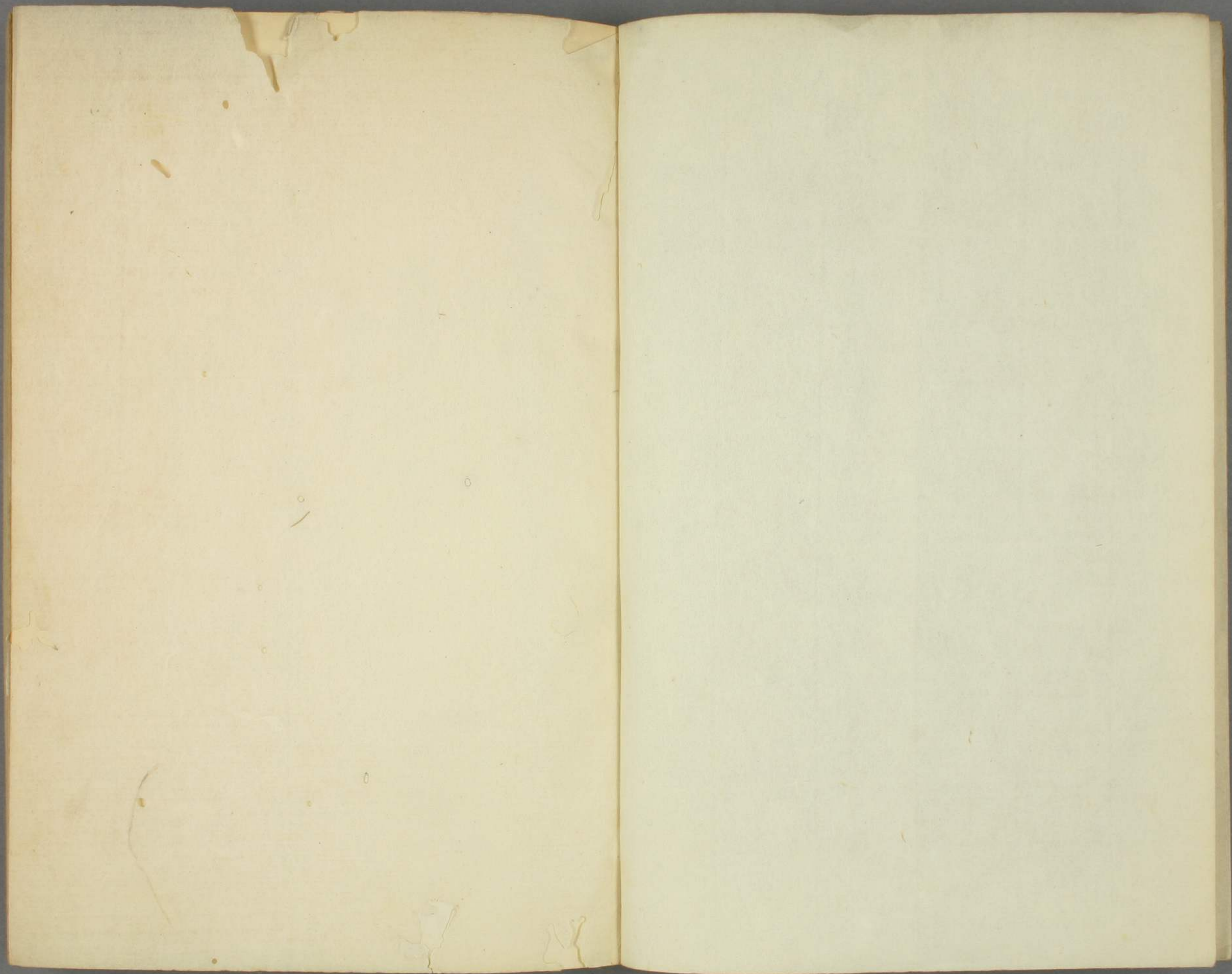
家忠日記

三之四

リ 5
2687
2







5
2687
2

家忠日記増補卷之三 自永祿七年至同十一年



永祿七年甲子

正月小



三日 大神君ノ兵賊徒ト小豆坂ニ戦フ賊箭
大神君ノ御手綱ニ中ル 大神君怒玉テ敵軍
ニ入テ是ヲ攻玉フ賊徒忽ニ敗北ス水野藤十
郎忠重石川新十郎ヲ撃テツ水野太郎作大見
藤七郎ヲ撃テツ

十一日土呂針崎野寺ノ賊徒等上和田ノ砦ヲ
破テ後岡寄城ヲ陥ント謀リ軍ヲ發テ先ツ
上和田ノ砦ヲ圍テ攻撃テ大久保カ一族是ヲ拒
テ奮戦ニ大久保五郎右衛門尉忠俊大久保七郎
右衛門尉忠四郎被ル一揆ノ兵上和田ノ砦ヲ
圍テ危急ノ由具告有ニ依テ 大神君後援
トシテ岡寄ノ城ヲ圍進テアリ土屋甚助及ニ
筒井甚六郎等先隊ニ進ニテ六名ノ郷ニ發
シヨカヲ震ヒカ戦シテ針崎野ニテ追退ク宇津

与五郎 大神君ノ御傍ヲ不去供奉ス于時
大神君銃炮ニ中リ玉フト云ヘ尺肌膚ヲ不犯中
根喜藏一揆ノ兵渡辺半藏ト一番槍ヲ合セ互ニ
槍ヲ奔太刀ヲ採テ奮戦ニ術ヲ尽スト云ヘ尺其
雌雄ヲ不決シテ遂ニ退ク時ニ鶴殿十郎三郎渡
辺半藏ヲ追討ント進ム半藏カ父渡辺源五郎
衛門尉半藏ヲ援来テ挑戦ニ遂ニ鶴殿ヲ討
取ル川澄大助源五郎門尉ヲ討ント進ム源五
郎衛門尉川澄ト不戦 大神君ニ向テ進ニ来

ル于時内藤甚市郎弓ヲ以テ源五左衛門尉カ
兩股ヲ射貫ク源五左衛門尉忽ニ倒ル其子半
藏是ヲ助ケ戰場ヲ退ク源五左衛門尉此疾
ヲ痛テ遂ニ死ス内藤甚市郎ハ
源五左衛門カ甥也大神君ノ為ニ其伯
父ヲ射ル依之 大神君内藤カ忠ヲ感称シ玉フ
土屋長吉郎ハ 大神君近習ノ士也一向ノ宗門
タルニ依テ一揆ニ組シテ命ヲ叛クト云ヘ凡今日
大神君ノ軍危ヲ見テ土屋一族ノ逆徒等ニ
語テ曰吾レ宗門ノ為ニ 君命ヲ背キ逆徒ニ組

シ骨ヲ碎テ屢苦戦ス今亦公ノ軍危ニ此時
宗門ヲ弃テ君ノ為ニ死シ是臣カ忠也ト謂
テ 大神君ノ前隊ニ加リ来リ奮戦矢ニ中テ
死ス于時二十
三歳日既ニ及黄昏ノ間兩陣互ニ兵ヲ収ム
此日ノ軍ニ一揆ノ兵十余人戦死ス雜兵猶死スル
者多クシ 大神君石川日向守家成ニ命シテ土屋
カ死骸ヲ求シメ玉フ家成從卒ヲシテ是ヲ尋
出シテ上和田ニ持来ル 大神君土屋カ忠死ヲ
憐惜玉テ家成ニ命シテ彼レカ死骸ヲ上和田

ニ葬セシメ玉フ

廿五日深津八九郎青山虎之助ト譏シテ宍糶ニ
佐ノ木ノ寺内ニ入テ敵宮ニ放火スヘシ其煙郭
外ニ見ヘハ卒ニ應シテ御味方ノ多勢寺中ニ
可攻入ト約シテ深津青山寺内ニ入ル其夜太
田カ一族等寺中ノ警衛タリ太田カ軍士是ヲ
知リテ大勢ノ中ニ取籠メ深津青山其志ハ勇
也ト云ヘ氏内應ノ者ヲ不求ニ因テ其事不成ニ
テ命ヲ殞ス

二月小

十三日御味方ノ兵石川亦四郎根来十内布施
孫左衛門等二十五騎為斥候針寄表ニ發ス
兼テ敵ニ是ヲ告ル者有故ニ賊徒等針寄
近辺ニ伏兵ヲ設テ是ヲ待ツ根来布施石川
等是ヲ不知針寄ノ外郭ニ近キ進テ伺フ
于時敵ノ伏兵前後ヨリ起リ左右ヨリ發シテ
四面ヲ圍ミ渡辺平六郎寛助大夫
等士卒ヲ指揮シテ急ニ戦ハシム根来布施

石川等是ニ不擬議園中ニ奮戦フ石川又四
郎疾ヲ蒙テ退ク根来十内ハ渡辺半藏是
ヲ射倒シ其首ヲ得タリ布施孫左衛門ハ寛
助太夫ト組テ其雌雄ヲ不決于時渡辺寛
ヲ助ケ来テ遂ニ布施ヲ殺ス佐ヲ不賊徒岡
寄ノ城ヲ襲ント伺フ 大神君自出テ戦玉
十日吉田太左衛門尉ハ一向ノ宗門ニ非ト云ハ
本多カ招クニ應シテ彼レニ組シテ一揆ニ加里土
呂ノ寺中ヲ守ル又 大神君ノ御家人奇藤

ノ某ト云者アリ吉田ト交好ノ旧友也故ニ奇藤
竊ニ書簡ヲ吉田カ許ニ遣シテ云ク寺中ニ
篋ル処ノ軍士等各思世ノ主君ヲ敬テ宗門
ノ為ニチリシヒク是武門ノ本意ニ非ス汝幸
ニ寺中ニ在リ本多及ヒ蜂屋等ヲ諫テ先非
ヲ悔テ降ヲ乞ニ於テハ公ノ免許ヲ蒙シカ吉
田是ヲ諾シテ本多ヲ諫ム本多吉田カ諫ヲ聽
ク蜂屋ハ大久保カ縁者タルニ依テ大久保亦
彼ヲ諫ム蜂屋是ヲ諾シテ 大神君ニ赦免

ヲ乞テ云ク今度一揆ニ与スルノ諸士各具罪ヲ
赦サレ本領ヲ安堵シ国中一向宗門ノ僧徒
等元ノ如ク在寺ノ赦免ヲ蒙リ亦一揆ノ張
本人一命ヲ助ケラレニ於テハ麾下ニ属シテ
上野ノ城及ヒ東条荒川ノ兩城ヲ陷レ軍忠
ヲ勵スヘキノ旨ヲ達ス 大神君命有テ白最
モ三ヶ寺ハ一揆ノ本人タリトイヘ氏沙門ノ義タル
ノ間死罪ヲ免許アラシカ是ニ与スルノ諸士ニ於
テハ一人モ不殘各御誅伐可有ノ旨也時ニ老

臣等諫奉テ云ク兵ヲ曝ス古又日淹シ是ニ依テ
御味方ノ軍勢多ク疲勞ス此時弊ニ乘シテ駿
甲兩國ノ敵三州ヲ侵シ龍衣ハ外ニ大敵ヲ受
内不平ニシテ危シ彼カ乞フニ任セ赦免アラハ
是ヲ案内者トシテ上野ノ城及ヒ東条荒川
ノ兩城ヲ安ク拔テ後進テ吉田ノ城ヲ陷ニ是
平均ノ謀ナルヘキ旨強テ諫奉ニ依テ

大神君遂ニ是ヲ許シ玉フ故ニ上和田ノ郷淨
聚院ニシテ自今以後一向ノ宗門ヲ弃テ幕

下ニ屬シ忠信ヲ可及ノ旨各起請文ヲ書シメ
玉ヒ三ヶ寺ニ楠篁ル処ノ諸士皆免許ヲ蒙ル
旨石川日向守家成土呂ニ至テ教命ヲ告ル賊
徒家成カ言ヲ聞テ戈ヲ投テ服ス吉良義
昭亦降ヲ乞ト云ヘ氏再犯タルニ依テ赦シ玉ハズ
故ニ義昭東条ヲ奔テ江州ニ走り佐々木承禎ニ
因テ蟄居ス 且後撰州芥川城ニ於テ遂ニ戦死ス 荒川甲斐又守ハ
大神君ノ雖為姻家一揆ニ子シテ野心ヲ企ルニ
依テ其罪ヲ恐テ荒川ノ城ヲ出奔シテ河州

ニ道ル 辭ヲ懸テ 櫻井ノ城主松平監物家次
大神君ノ赦免ヲ請フ患世ノ士タルニ依テ其罪ヲ宥
ラル

四月小

七日小笠原新九郎安元 後ニ撰津始テ 大神君ニ
謁テ麾下ニ屬シ本領三州幡豆ノ郷ヲ賜ル

五月大

十三日今川氏真カ臣小原肥前守三州吉田ノ
城ニ在テ國中ノ質ヲ捕テ城ニ篁置キ三州

ヲ畧セント伺フ雖然三州ノ諸士小原ニ不從各
大神君ノ麾下ニ屬シテ忠義ヲ尽サント欲スニ連
木ノ城主戸田主殿助モ 大神君ノ幕下ニ屬テ軍
忠ヲ勵ント欲スルト云ヘ氏質トシテ其母吉田ノ城
ニ在リ依之戸田志ヲ顯シ 大神君ニ忠義ヲ尽
ス莫ク不得依之戸田是ヲ謀テ屏女吉田ノ城
ニ往テ小原ト交ヲ厚クシ常ニ双六ヲ弄テ興シ
催シ老母ヲ奪ヒ返サント謀ル或時戸田
吉田ノ城ニ入テ如例小原ト双六ヲ興ス戸田カ家

人ニ野ノ山ノ某ト云者アリ酒肴ヲ長櫃ニ入テ
下人二人ニ舁セ吉田ノ城門ニ至リ櫃ノ蓋ヲ開テ
其中ヲ警言衛ノ士ニ見セシメテ云ク戸田小原ヲ
慰メテ酒宴ヲ催ス此次ヲ以テ母ノ汚衣ヲ改メ
易ント欲ス此櫃ヲ城外ニ返サシ時彼汚衣ヲシ
テ櫃ニ入シメ歸リ去シ疑フ莫クナカレト野ノ山
慇懃ニ言フ尽ス勤番ノ士是ヲ聞テ戸田カ
從者常ニ城中ニ往来スルニ依テ怪ム莫ク是
ヲ諾ス戸田ト小原ト双六ヲ弄テ酒ヲ勸ム其間

ニ野ノ山戸田カ老母ヲ長櫃ニ入レテ城門ヲ出ル
警衛ノ士敢テ不咎戸田カ軍勢途中ニ迎ヘ
是ヲ敬言固シニ連木ノ城ニ帰入ル戸田暇ヲ小
原ニ告テ城門ヲ出城下ノ町ニ放火シテニ連
木ノ城ニ馳帰ル兼テ具役ヲ定玉フニ依テ
大神君御油ノ駅ニ御陣坐アリ放火ノ煙ヲ見
玉テ兵ヲ下地村ニ奔シ玉フ 大神君戸田主殿
助カ智謀忠孝ヲ御感有テ旧領八百貫并米
地二千貫ヲ被加賜 大神君吉田城也喜見

寺ニ若ヲ築テ松平主殿助伊忠鶴殿八郎三郎ヲ
シテ守ラシメ玉フ亦糟塚ニ要害ヲ修シテ小笠
原新九郎ヲシテ是ニ居ラシム一ノ宮ノ若ハ本
多百助是ヲ守ル戸田主殿助ニ連木ノ城ニ在
テ屢兵ヲ吉田ノ城ニ送シ小原ト苦戦シテ遂ニ
戸田戦死ス 大神君軍ヲ送テ野田牛窪ノ城
ヲ攻撃シメ玉フ御味方ノ兵大ヒニ勝テ敵死亡ス
大神君師ヲ帥テ吉田ノ城ヲ攻玉フ城主小原
肥前守城外ニ出張シテ是ヲ拒ク松平主殿

伊忠カ兵喜見寺ノ若ヨリ登テ亦小笠原新九郎
及ヒ蜂屋半之丞ニ連木ヨリ軍ヲ出シテ小原ト
挑戦フ本多平八郎忠勝七歳先鋒ニ進テ牧
野宗次郎ト槍ヲ合テ勇ヲ震フ松平玄蕃元
清宗後備後龍念寺口ニ於テ槍ヲ合セ海ヲ
被ル事ニテ処首五級ヲ得タリ從卒三人戰
死ス蜂屋半之丞本多忠勝ト先陣ヲ爭テ
進戰ニ銃炮ニ中テ死ス敵味方互ニ奮戰
ト云ヘ氏雄ヲ不決日及黄昏ノ間小原兵ヲ

収テ城ニ入ル小原肥前守吉田ノ城也依殿八
幡ニ要害ヲ構ヘ三浦左馬助ヲシテ是ヲ守
ラシメ吉田牛窪西城ヲ以テ根城トス今川
氏真吉田ノ城後援トシテ兵一萬余騎ヲ率
シ軍ヲ三州ニ発シテ陣ヲ分テ二列トシ其兵
五千余騎ヲシテ本多百助カ守ル所ノ一宮
ノ若ヲ圍ニシメ躬ヲ五千余騎ヲ率テ依殿
八幡ニ屯ス本多使ヲ岡崎ニ発テ後援ヲ
大神君ニ乞フ依之 大神君師ヲ帥テ一宮

ノ城ニ御進ニ祭ニアリ其兵三千余騎佐股ト八
幡ノ間道ヲ経テ本野カ原ニ軍ヲ出シ玉
フ今テ川氏真諸卒ヲシテ佐股ニ陣セシメ本
陣ヲ八幡ニ張ル兩陣ノ間僅ニ近シ

大神君其間道ヲ通り玉フト云へ氏勇氣不
撓列不乱其嚴整ナルニ辟易シテ氏真多
勢タリト云へ氏敢テ向ヒ戦古之ヲ不得

大神君三千余騎ノ兵ヲ一ノ宮ニ祭テ城ヲ圍
ム今テ川カ兵五千余騎ト戦ニシテ進ニ玉フ

敵其武威ニ恐レテ不戦シテ圍ヲ解テ午寢
ニ退ク城將本多百助利ニ乘シテ城中ヨリ
軍祭シ今テ川カ兵ヲ追討テ敵悉ク離散ス其
夜大神君一ノ宮ノ若ニ御陣坐アリ俗ニ是ヲ
大神君ノ
一ノ宮後
詰ト云フ遠州濱松ノ城主飯尾豊前今テ川カ
陣ニ在志ヲ大神君ニ通ス故ニ詐テ病ト称シテ
此夜濱松ニ帰ル新井白根賀ヲ過ルニ及テ火
ヲ放テ驛舎ヲ焼ク今テ川此煙ヲ見テ大ニ驚
キ駿州ニ帰ル

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page.

小郷一急お動つてよお大保を新ふてよ
由事如兼山中と美一の存所勢の維傳後ホ
向ひ元可存星支とやゆゆ

永禄七年甲子

六月廿二日

藏人

家原

兩井九田の厨敷

今川氏真朝比奈肥後守ラシテ三州田原ノ城ヲ
守ラシム 大神君本多豊後守廣孝ヲシテ梶
ノ郷ニ取出ヲ築テ是ニ居ラシメ田原ノ城ヲ攻

討シメ玉フ廣孝カ家人本多甚十郎城兵長
谷川十郎三郎ト槍ヲ合ス廣孝進テ遂ニ外郭
ヲ攻敗ル朝比奈拒夏ヲ不得乞降テ城ヲ
大神君ニ獻ス 大神君是ヲ許シ玉フ朝比奈
僅ニ免レテ駿州ニ走ル 大神君廣孝カ軍功
ヲ賞シ玉テ田原ノ城及ヒ梶ニ寄白屋浦ノ
郷敷地新野美ノ郷等ヲ廣孝ニ賜ル廣孝
田原ノ城ニ移居テ命ヲ奉テ攻テ其近郷ヲ取
ル依之赤沢矢久間高松赤羽根神部等七

千余貫ノ地ヲ亦廣孝ニ賜ル
今度田系権之西出リ付為其力盡込
地ノ事

二百貫文

田系ノ郷

百五十貫文

権ノ郷

五十貫文

二場ノ郷

五十貫文

白屋ノ郷

百貫文

津ノ郷

七十貫文

高野ノ郷

百貫文

新地美ノ郷

田系ノ城誰ノ以調略能而動ノ事代ノ
そ方上ノ月ノ并中王山出動ノ事

造動ノ地ノ内一各法及浮取勢其方ノ内計
右條ノ永不可有取違ノ法内お不足ノ心
他地ノ造動ノ能誰ノ何事能地ノ事代ノ
為布地田系其地檢地能者ノ於造動地
可免除者地内事件

永祿七年申子 六月日

高野 家原

平多作左工

永禄八年七丑

三月小

七日大神君三州ノ制法ヲ定ムル本多作左工
門尉重次高力与左衛門尉清長後河内守天野
三郎兵衛尉康景ヲ以テ参州ノ三奉行ニ定
ムル

十一月大

廿七日此日三河ノ国人鈴木八右衛門ニ故有テ證
文ヲ賜ル

濃尾地ノ内

- 一 三石五斗五年 禰宜方付内一石八斗進
 - 一 二石八斗七年 四高右衛門方内并外蔵入
 - 一 三石五斗八年以上拾石也其代拾石之
- 方ノ分依有テ酒酒并雜樂以テ奉養而令其
持也永三ノ有相違ニ杖也

永禄八年七丑
十一月七日

康景

陸奥八重の巻

此年大神君戸田三郎右衛門尉忠次三三州
大津村ニシテ食禄ヲ賜ル

此年大神君兵ヲ卒ニシテ寺部ノ城ヲ攻撃
シム守將鈴木日向守城ヲ弃テ家並ノ采地ニ
入ル酒井將監岡寄ノ宅ヲ去テ上野城ニ備
ル酒井忠次本多康重ヲシテ是ヲ謀ラシメ
玉ヲ將監遂ニ上野ノ城ヲ弃テ駿州ニ走ル
東三州ノ士牧野設樂西郡菅沼白井及長

篠篠段峯作手ノ兵皆大神君ニ降テ麾下ニ屬ス

十二月大

廿日遠州濱松城主飯尾豊前守大神君ニ内
應ス依之今川氏真飯尾ヲ惡テ駿州ニ招テ
則殺戮ス飯尾カ臣江馬安藝同加賀守瀨
松ノ城ヲ守テ大神君ニ猶モ志ヲ通ス

永禄九年丙寅

二月大

十日大神
ニジ米地ヲ

五

九日三州

嗣子牧野

跡ヲ筆ヒ

成ニ其遺

一其身

元兩江馬ニ印ヲ賜テ旧冬ノ忠切ヲカ

女堵セサセ是ヲ勵シ玉フ

大

窪ノ城主牧野成定卒去シテ後

石馬允康成ト其族牧野出羽守遺

討論ニ及フ于時 大神君牧野康

跡ノ領地安堵ノ御書ヲ賜ル

難説録ニ成有弘明ノ事

有於切ニ事出仕ニ所任有る事

一判形

附法

右之條

永録

用臣の方難有申此許容有る事

故人ノ事五六人存シ一のおおけり

不可有おまじし物のおけり

九月

五月九日

藏人 家康

下野守信元ニ命テ牧野出羽守ヲ被

大神君水
追放

十一

月大

四日 大神君ノ鈞命ヲ奉テ水野下野守信元
ヨリ牧野康成カ族及家臣等ニ書簡ヲ遣ス
令カ右馬允及就死云云職ヲ去ル有る為ニ
一礼家康リ出ル但具利ヲ拙夫ニ達ス子當
也其ハ居坊上世より抑レ九國皆一礼其旨
可クハ是等ノ報各々ト可ク抑レ右馬允及所
息馳走可クハ一兩年驢河ノ能ク留置ル諸
君等ノ多ク是等ノ旨ハ假令固時ノ内
ノ多ク君ヲ申ル礼一礼ト上ニ抑身止テ一礼
不

可有疎略ハ就吏出ル及父子是何方也
有カト由折以ル共家康ト達ス可クハ是
亦不禮何意ハ其如神

永祿九丙寅年

十一月四日

牧野山城守殿 稻垣平直殿
能成坊徳守殿 山本高力殿
喜多川守殿 同 長慶殿
牧野重中守殿

廿九日大神君從五位下ニ叙シ三河守ニ任シ玉フ
此年大神君戸田三郎右衛門尉忠次ニ与カノ士三
十二人ヲ附セシメ玉ヒ三州野田ノ郷ニ於テ与カノ
給地ヲ宛行ル其餘戸田兵右衛門尉戸田九右衛門
尉戸田与五右衛門尉等ニ別地ニシテ食禄ヲ賜ル

永祿十年丁卯

鈴木日向守及ヒ男監物家並ノ采地ニ入テ暫ク是
ニ居ルト云ヘ氏堅ク守ルヲ得ス遂ニ駿州ニ走ル

五月大

廿七日三郎信康十時織田信長ノ女十時娶玉フ
佐久間信盛嫁娶ノ使トシテ岡崎ニ来賀ス

七月小

頃年氏真遊興ヲ好テ武業ヲ忘レ奢侈積惡
身ニ余ル是亡國ノ端也ト諸人眉ヲ顰ム氏真
カ寵臣三浦右衛門作ト云者アリ其寵誇リ
遊宴ヲ好シテ是ヲ氏真ニ勸ム
夫三浦右衛門作ハ小原肥前守カ子也美男タル

ニ依テ氏真是ヲ愛テ今川家ノ臣三浦次郎右
衛門尉カ長子トシテ其遺跡ヲ継カシム小原
肥前守ハ江州ノ人ナリ天文七年今川義元
豆州執海ニ入湯ス江州ノ任人小倉三河守ト
云者此時執海ニ入湯ス義元三河守ヲ招テ幾
内ノ軍事ヲ語ラシメ是ヲ聞テ義元三河守カ
武功ヲ感シ駿州ニ彼レヲ留テ臣タラント乞フ
三河守固辭テ云ク我已ニ老衰ス仕ヘテ其功
成シ難シ愚子ト助ヲシテ駿州ニ往テ義元ニ

屬セシメント約シ三河守江州ニ歸テ後翌年ノ春
其子小倉子助遂ニ駿州ニ来テ義元ニ仕ル
同十一年ノ秋八月三州小豆坂ノ合戦ニ小倉無助
尾州ノ豪士槍三位ヲ組撃テシテ首級ヲ得タリ
義元是ヲ褒テ感状ヲ与助ニ与ル其後小倉カ
軍功數度ニ及ノ間義元弥彼レシ美稱ス是
ニ依テ小倉ヲシテ其器ヲ撰ハシメ江州ノ宰人青木
筑後守同姓加賀右衛門尉及小原肥前守兄弟坂
井以下其余濃州和州中武名アルノ士ヲ數輩

駿州ニ招テ義元是ヲ扶持
其子小倉内藏助小原肥前
作等氏真ニ仕ル三浦右衛門
トナリ小倉内藏助ハ十八人
共ニイテ夕年少シト云ヘ氏真
是ヲ許ス小倉内藏助者
三年越州ノ景帝相州小倉
伺フノ時今テ川援兵トシテ
ニ赴カシム小倉小田原ノ城ヲ

小倉子即卒テ後
守カ男三浦右衛門
トハ小番衆ノ隊長
衆ノ頭トナル西輩
名アルニ依テ氏真
ハ歳ニシテ永禄
原ノ城ヲ略セシト
小倉内藏助ヲ相州
拒キ亦武州川越

ノ城ニ往テ是ヲ守ル干時景
越ノ城ヲ圍テ攻撃テ小倉
ニ戦功ヲ尽ス北条氏康其
小倉ニ授ク小倉駿州ニ歸
麩テ十八人衆ノ頭トナス三
引間ノ城主飯尾逆意ノ時
タルニ依テ三浦右衛門作其
城ヲ攻テ戦功ヲ尽ス氏真
ニ依テ跡其武功ヲ美称シ

兵ヲ松山ヨリ召テ川
之ヲ拒キ勇カラ震
ヲ散ラ美テ感状ヲ
後今川其武功ヲ
右衛門作ハ遠州
ハ小原肥前守病病
半勢ヲ卒テ引間
然テ彼レヲ愛スル
遂ニ小番衆ノ隊

長トス父小原肥前守ハ永祿七年ニテ三州ノ郡
代トシテ吉田ノ城ニ在テ父子共ニ其武威ニ奢ル
今川家ノ臣三浦朝比奈葛山斎藤由比福島等
ヲ始テ二十余人先年尾州桶狭間ニシテ義我元
命ヲ殞スノ時大ヒニ敗シ駿州ニ北テ帰ル各是ヲ
耻テ閑居ス依之小原父子及ヒ小倉等自然ト權
ヲ執ル故ニ今川家ノ旧臣等是ヲ嫉テ恨ヲ會
者多シ氏真カ外祖父武田信虎此時ヲ伺ヒ野
心ヲ企テ今川カ老臣等ト議テ氏真ヲ亡シ駿

州ヲ奪取ント謀ル此企露顯スルノ間氏真大ニ
怒テ菴原安房守ニ下知シテ信虎ヲ追放ス信
虎駿州ヲ出奔シテ京都ニ免ル于時信虎使
ヲ甲州ニ遣シ其子信玄ニ告テ云ク今川家ノ老
臣等氏真ヲ敬テ我レニ与スルノ間駿州ヲ略セ
ント欲スルノ処ニ隱謀露顯シテ其事成ス遂
ニ駿州ヲ去ル汝宍糶ニ謀テ駿州ヲ奪フヘキノ
旨説カシム依之信玄今川カ老臣等ヲ謀ル各
是ニ從フ信玄悦テ駿州ヲ侵シ奪取ント伺フ

永祿十一年戊辰

正月大

十日 大神君左京大夫ニ任シ玉フ

三月小

七日 大神君兵ヲ登テ堀川ノ城ヲ攻撃シシメ玉フ神
原小平太康政松平島四郎信一先登ニ進テ軍功
ヲ尽ス大久保甚十郎平井甚五郎小林平大夫等
戦死ス堀川ノ城遂ニ陥ル

大神君御凱旅ノ時山本帯刀ニ命テ見付ニ城ヲ築
シメ玉フ 大神君宇津山ノ城ヲ攻玉フ守將小原倫
前守城ヲ弃テ去ル于時小原硝火ヲ城中ニ埋ム御
味方ノ先隊城中ニ攻入ル宿火忽ニ発ス然レモ
御味方ノ兵害ニ遭フ者ナシ

四月大

遠州二股ノ城主二股左衛門尉及ヒ高叡ノ浅
原須田寺ノ松下各降ヲ乞テ 大神君ノ麾
下ニ属ス又久野ノ城主久野三郎左衛門尉宗

能モ今川ヲ敬テ 大神君ノ麾下ニ属シ軍忠
ヲ勵サント欲ス

九月大

七日織田信長佐々木兼頼ヲ討ント欲シ師ヲ帥
テ岐阜ヲ築ス

十日信長江州愛知川ニ至リ兵ヲ進メテ観音寺
ノ城ヲ攻ント欲ス先ツ箕作ノ城ヲ圍ム本林三右
衛門尉可成坂丹右近柴田修理亮勝家先驅
タリ兼頼和田山ヲ築テ兵士ヲシテ是ヲ守ラ

シム信長江州ノ軍勢ヲシテ和田山ヲ押ヘシメ箕
作ノ城ニ向ヒ佐久間右衛門尉信盛木下藤吉
郎秀吉丹羽五郎左衛門尉長秀浅井新八郎等
ヲシテ是ヲ攻シム城兵能ク拒テ城陥ラス是ヨリ
前信長援兵ヲ 大神君ニ乞フ 大神君是ヲ
諾シ玉テ松平勘四郎信一後伊豆守ヲ援助ノ首
將トシテ兵一千余騎ヲシテ江州ニ赴カシメ玉フ
十二日信長佐久間信盛ヲシテ松平勘四郎信一
カ遠来ヲ勞テ箕作ノ城ヲ攻ル先隊トス信一

諸將ニ先シテ箕作ノ城ヲ攻テ外部ヲ破ル信長
ノ兵同ク進テ攻入りニノ丸ヲ破ルト云ヘ氏寄子ノ
軍勢命ヲ殞シ歟ヲ被ル者數百人ニテ進ニス
木下藤吉郎亦吉夜ニ入り本城ニ攻入ル島四郎
信一先登ス干時信一大ニ呼テ云ク三州ノ援
兵松平島四郎信一箕作ノ城先登ト云ク諸
卒偏リ其意ヲ聞ク城將建部源八郎拒ク吉ヲ
得ス宥竊ニ城ヲ出テ免レ去ル依テ箕作ノ城陥ル
十三日信長信一ヲ招テ昨日箕作ノ城ノ先登其

勇敢ヲ美称シ大ニ感テ云ク汝カ肝ニ毛生ヒタリト
謂ツヘシ信長着スル所ノ葦洞眼桐ノヲ以テ信一
ニ授ク是ヨリ信一桐ノ紋ヲ以テス信一カ家ノ紋元ト葵タリト云ヘトモ
即當家ニ憚リアルニ依テ改メテ酸將草ナヒ桐ヲ紋トス
佐々木兼禎箕作ノ城陥ルヲ聞テカラ失ヒ觀音
寺ノ城ヲ奔テ甲賀郡ニ退ク和田山ノ城モ亦没
落ス信長兵ヲ進メテ十八ノ城ヲ拔テ江州漸ク
平ク干時信長不破河内守ヲ遣シ義昭靈陽ヲ
迎フ義昭悦テ江州守山ニ到ル信長謁見シ義
昭ヲ挾テ洛ニ入ル

廿日義昭洛ニ入テ清水寺ニ寄宿シ信長ハ
東福寺ニ在リ信長菅屋九郎左衛門尉ヲシテ
京師軍勢ノ狼藉ヲ禁制ス于時松平島四郎
信一カ下人ト織田上野久信包カ從卒京師ニ入テ
乱妨捕ニ古キ烏帽子ヲ爭ヒ奪テ口論ス其
更止ニス既ニ鬪諍ニ及ントス美濃尾張兩國
ノ多勢一同ニ起テ信一カ寄宿ヲ圍ム信一カ從士
等弓銃炮ヲ以テ是ヲ拒ント欲ス信一押ハ留テ
狼藉ノ所謂ヲ問フ洛中騷動ニテ靜ナラス信

長聞テ大ニ怒リ則使ヲ發テ尾濃兩國ノ軍勢
ノ中狼藉ノ張本人ヲ禁メ懲勅ノ使者ヲシテ
信一ニ謂テ云ク尾濃ノ下卒等卒尔ノ狼藉
信長全ク是ヲ不知ノ旨ヲ陳謝ス重テ信長
使ヲ以テ持筒ノ銃炮一挺ヲ信一ニ与ル信一暇
ヲ信長ニ告テ三州ニ歸ル

十二月小

六日今川氏真カ家臣等志ヲ武田信玄ニ
通ス依之信玄駿州ヲ畧セント欲テ兵ヲ卒テ

甲州ヲ元ス

大神君武田信玄ト大井川ヲ堰トシテ遠州ヲ
領セント約ヲ成シ玉フ

十二日大神君菅沼新八郎定盈今泉四郎兵
衛尉延傳ヲ御導サトシテ遠州丹伊ノ谷ニ御進
出アリ菅沼今泉ヲシテ菅沼次郎右衛門尉鈴
木三郎大夫迄藤石見守三人ヲ招カシメ玉フ各
命ニ從テ麾下ニ屬ス依之 大神君彼ノ三人
ニ食邑ヲ宛行ル

一今度就遠州入軍前而三人以忠節丹伊ノ谷篤
令案内可引入之由感悦之至也其上彼忠節
ニ付而出置知行之吏

一丹伊ノ谷跡職新知本知一圓出置之吏

一二股左衛門跡職一圓之吏但是ハ五貫文之吏

一高園曾子方之吏 一高梨

一氣賀之郷 一カシメノ郷

一一三ツク橋ツノ共ニ 一山田

一川合 一カヤハ

一 国領

一 カニサウ

一 人見ノ郷

一 野ノ辺

一 カニノ郷

并新橋小沢ノ渡右彼書立之今何モ不入無相違
永為私領出置所也并於此地田原三百貫文可出
置者也并伊ノ谷領之外以此書立之内二千貫文
任望地可出置也若從甲州如何様之義被申更
候共以起請文申立上者進退ニカケ申理無相
違可出置也縱何方へ成共何様之忠節ヲ以

先判形出置共於此上者相違有間敷者也委細
者管沼新八郎可申候也仍如件

十二月十二日

家康

管沼次郎右門殿

近藤石見守殿

鈴木三郎大夫殿

十三日 大神君管沼新八郎定盈ノ忠義ニ因テ是
ヲ賞シテ食邑ヲ賜ル

今度忠節ニ付而遠州本地川合之郷并高部

無相違可出之此上者縱錢棟別十二坐諸役為
不入可有知行之將亦為新地河西三百貫
可出之上永相違有間敷者也手先弥可令馳
走者也委細者今泉四郎兵衛可申者也仍如件

十二月十二日

家康

菅沼新八郎殿

十六日今泉延傳菅沼定盈 大神君ノ釣命ヲ
奉テ菅沼次郎右工門尉近藤石見守鈴木三郎大
夫三人ニ誓詞ノ書簡ヲ遣ス

今度丹伊ノ谷調儀走廻之段本望至極候吉
田郷之半分ノ納百姓共無相違進之候彼半
分之為相當養父之郷五十貫相添進置者
也此上者向後別而無御等閑前々之意趣
無之互ニ真實ニ可申合候今度從岡寄被出
知行方之美少王偽有間敷候拙者之證人
立候上者虚言有間敷也若此旨偽ニ付而ハ
梵天帝釈四大天王別而富士白山愛宕地藏
阿弥陀佛御四訓ヲ今生後生深可蒙者也仍如件

永祿十一年

極月十三日

菅沼新八郎

定盈

今泉四郎兵衛

延傳

近藤石見守殿

鈴木三郎大夫殿

此月十二日武田信玄師ヲ帥テ駿州ニ入り進テ
由比ノ近辺松野ニ陣ス今川氏真清見寺ニ出
張シ菴原安房守ヲ先隊トシテ薩埴山ニ向

ハシム此日午ノ刻軍ノ矢合スヘシト相議スルノ
処ニ氏真カ臣瀨名朝比奈三浦高守ヲ加テ
兼テ志ヲ信玄ニ通スルニ依テ其陣ヲ弃テ駿
府ノ城ニ歸去ル菴原獨リ薩埴山ニ進ムト長
氏其兵微ニシテ武由カ多勢ト戦ヒ難シ故ニ
氏真ト共ニ軍ヲ引テ府ノ城ニ歸ル氏真家
臣ノ野心アル事ヲ知ラス城ニ老臣等ヲ招テ軍
ノ謀ヲ議ス于時朝比奈兵衛大夫其坐ヲ去テ
鎧ヲ脱テ 披燒キ火ニ背ヲ煖テ踞ル小倉

内藏助岡部忠兵衛尉等是ヲ怪ニ疑テ氏真
ニ告テ云ク大敵既ニ近ク迫テ危急也此時ニ
至テ甚急ルノ形勢亦今朝敵ト戦カハサル
以前ニ陣ヲ退テ府ノ城ニ歸ルテ彼レ若野心
ヲ探ムカノ由シ氏真ニ訴フ氏真是ヲ聞テ日
根野備中守小倉内藏助シテ朝比奈兵衛
大夫ヲ殺サシメント欲ス日根野小倉氏真旨
ヲ受テ先ツ朝比奈カ野心ノ實否ヲ試ニカ
為ニ兩輩太刀ノ柄ヲ握リテ彼レヲ撃テツヘキ

形勢ヲ夥敷顯ニ近ク寄ルト云ヘ氏朝比奈敢
テ情ヲ動カサス依テ日根野小倉等朝比奈
ヲ殺サス歸リ来テ彼レカ野心ヲキノ旨ヲ氏
真ニ告ル氏真聞テ是ヲ許ス既ニシテ朝比
奈駿府ノ城ヲ免ト出テ逐電ス然リト云ヘ氏
朝比奈質シ府城ニ残シ置ノ間兵衛大夫カ
逆意露顯ス武田信玄カ先陣山縣三郎兵衛
尉馬場美濃守小山田兵衛尉小幡上総久真田
源太左衛門尉同兵部少輔内藤終理亮等江尻

ノ馭ヲ經テ進テ上原ニ陣ス于時氏真カ家臣
等信玄ニ志ヲ通スルノ者數輩アル由頻リ
ニ巷説アリ故ニ群疑屢起テ其古又成リ難キ
ニ依テ氏真從者二千余人ヲ卒テ遂ニ駿府
ノ城ヲ避テ土岐ノ山家ニ退キ後懸川ノ城ニ入
ル信玄兵士ヲシテ府ノ城ニ放火ス今川カ臣ニ
余人氏真ヲ殺テ各信玄ニ屬ス信玄降人ノ質
ヲ捕テ甲州ニ遣シ駿州江尻丹ノ上ノ近辺ニ要
害ヲ築テ軍士ヲ籠置其身ハ久能山ニ屯ス

駿州ヲ平ケント謀ル然リト云ヘ氏真カ臣由
比淺原裔藤伊久見ノ山ニ楯籠リ小原肥前守
其子三浦右衛門作ハ花沢ノ城ニ在テ堅守リ
拒ク三浦右衛門作ハ氏真カ寵臣也故ニ三浦
ハ氏真ト共ニ掛川ノ城ニ入ヘケレト掛川ノ城
主朝比奈備中守ト三浦常ニ不快也依之氏
真ニ別レテ花沢ノ城ニ入テ是ヲ守ル私ノ遺
恨ヲ以テ忠義ヲ忘ルルヘシ藤枝ノ城ニハ
長谷川次郎右衛門尉ヲ首將トシテ彼カ族

二人其兵三百余騎ヲ以テ是ヲ守ル
大神君掛川ヲ攻ント見付ニ陣シ玉ヒ兵ヲ
入山瀬ニ動シ軍士ヲシテ丹ノ谷ノ地ヲ攻撃
テ遂ニ丹ノ谷ノ城ヲ拔カシメ玉フ菅沼忠誠
ヲ尽ス菅沼近藤ヲ郷導サトシテ本攻ニ発テ
刑部ノ城ヲ陥レ玉ヒ菅沼新八郎定盈カ從士
菅沼亦左衛門尉ヲシテ刑部ノ城ヲ守ラシメ玉フ
十八日大神君遠州安間村ニ陣シ玉フ江馬
安藝守同姓加賀守ヲ殺ス加賀守カ從者

小野田彦左衛門尉又安藝守ヲ殺テ更テ以テ
大神君ニ告ル大神君即日瀨松ニ入玉フ高天
神ノ城主小笠原五八郎馬伏塚ノ城主小笠原
美作守二人共ニ氏真ト信玄兩将ノ間何レニ
カ屬テ軍忠ヲ尽サント其志未タ一決セス
千時大神君三州幡豆ノ城主小笠原新九
郎安元同姓主膳正及ヒ伊予守等ヲ召テ命
有テ曰小笠原五八郎及ヒ美作守二人ヲ汝等
カ言ヲ以テ幕下ニ屬セシムヘキノ御旨ヲ奉

テ安元直ニ高天神ニ祭ス小笠原与八郎信玄
ニ属セント故テ質ヲ推テ高天神ヲ祭ス
途中ニシテ安元ニ逢フ安元 大神君ノ釣
命ヲ与八郎ニ説ク与八郎其言決ニ難シテ
猶豫ス安元強テ是ヲ諫メ遂ニ大神君ノ
麾下ニ属セシメ安元途中ヨリ与八郎ヲ推テ
帰ル 大神君安元カ功ヲ悦ヒ至テ三州赤羽
根赤沢芦三ヶ村ヲ安元ニ賜ル
武田カ臣秋山伯耆守信友使ヲ遠州久野ノ

城ニ祭テ久野三郎左衛門尉宗能ヲ招テ信玄
ニ属セシメント乞フ是ヨリ先キ 大神君酒井
左衛門尉忠次ヲシテ久野ノ城ニ赴カシメ玉
ヒ宗能ニ命有テ曰近日掛川表ニ御進出ア
リ干時軍忠ヲ励ムヘキ由 御旨ヲ蒙ル宗能
命ニ従フ故ニ宗能秋山カ使ヲ聽カス秋山是
ヲ怒テ兵ヲ平尾村ニ祭テ久野ノ城ヲ攻討
ニト伺フ宗能一族従兵ヲ卒テ鼻崎洞ヲ
要害トシ進テ秋山ト戦ヒ軍利ヲ得テ敵

ヲ多ク討取ルト云ハ氏味方ノ兵士久野彦
六郎ヲ始テ數十人戦死迄日 大神君掛川
御進祭ノ告ヲ聞テ秋山平尾村ノ陣ヲ退ク
依之宗能兵ヲ久野ノ城ニ収ム

秋山伯耆守信友信及伊奈ヨリ兵ヲ遠州ニ
股ニ祭テ愛宕山ヲ經テ見付ニ至テ此ノ奥
平道汝菅沼伊豆守同姓新九郎田岸新三
郎等軍ヲ見付ニ祭テ秋山ト戦フ奥平菅
沼田岸等軍ニ利ヲ失フ秋山勝ニ乘テ進

テ引間ニ至リ遠州ヲ畧セント欲ス乾ノ城主
天野宮内左衛門尉去々年ヨリ信玄ニ屬ス
依之天野其手合トシテ軍ヲ引間ニ祭テ秋
山ニ来會ス依之 大神君大ニ怒リ玉テ兵ヲ
祭テ秋山ヲ討ント欲シ玉フ秋山是ヲ聞テ軍
ヲ引テ信州伊奈ニ逃ケ去ル

廿七日 大神君火ヲ掛川ノ城下ニ放テ攻討
タシメ玉フ

廿八日 大神君砦ヲ掛川ノ四方ニ構ヘ是ヲ

守ラシメ見付ニ還リ玉フ

先日駿府ノ城没落シテ氏真他邦ニ走ルノ
時三州ノ質松平源三郎及ヒ酒井左衛門尉
忠次カ娘ヲ駿府ニ弃テ置是ヲ預ル三浦
与一郎今川氏真ヲ救テ武田信玄ニ属ス依
之三浦具質ヲ携リヘ甲州ニ往テ是ヲ信玄ニ
遣ス信玄大ニ悦テ遠三兩國ヲ畧センニ是
ヨキ質也ト謂テ警衛ノ士ヲシテ堅ク是ヲ守
ラシム

年有テ或夜大雪烈風ス警衛ノ士聊怠ルノ
時源三郎其節ヲ伺ヒ竊ニ免レ出テ雪中ヲ
凌キ險難ヲ経テ勞シテ遂ニ三州ニ歸ル深
雪ニ痛テ両足ノ指落損ル

久野三郎左衛門尉宗能其子千菊丸ヲ推乃
大神君ノ御営中ニ参候シテ大神君ニ謁
ス宗能愛子千菊丸ヲ御営中ニ留テ質ト
シ暇ヲ告ケ久能ニ歸ル干時大神君其忠
美ヲ御感有テ本領安堵ノ御書ヲ宗能

二賜儿

久野一門本知行之夏

德留村 池方渡方 中村方

上久野 若狹方 下久野 上末元

下末元 別所村松 同藤谷方 菅谷

不入計 富賀見 谷川戸綿 岩滑

宮賀嶋 松袋升 名賀島 祝井

德光 又取名 栗地 正道

掘越之内 海藏寺領 土氣

栗木之内 五十貫文 勝田之内 中村五十貫

鎌田 下河合之内 帳外 岡部之内 給物有之

国領 給物有之

以上都合二千五百貫文

右今度忠節三付而本地如駿州之時宛行
知永不可有相違若此以前何名判取雖出
置此上者不可有別条彌於抽忠節者
可令扶助者也仍如件

十二月廿一日

家康

久野三郎左衛門殿一同同心衆

宗能愛子千菊丸ヲ質トシテ御營中ニ残シ
置リ交 大神君其志ヲ感シ玉テ千菊丸ニ

別ニ食禄ヲ賜ル

山名庄之内井ノ領

コモガキ トクミツ 天王 ヲヤハ

横井 別所 ノフ、サ

七ヶ条此外大屋十八貫文

右之旨領掌之上永相違有間敷者也仍如件

永禄戊辰

十二月廿八日

家康

久野千菊殿

此月皇子誠仁親王陽光院元服加冠晴良二条
理髮經元朝臣

家忠日記增補卷之三終

家忠日記増補卷之四 自永祿十二年至元龜三年

永祿十二年己巳

三月大

大神君見付ノ古城ヲ毀テ新ニ溝墨ヲ終セシ
メ玉フ

十七日 大神君兵ヲ卒テ掛川ニ向ヒ天王山ニ陣シ玉フ
十八日 北条氏康カ男氏政四万五千余騎ヲ卒テ
今川氏真ヲ援ントス進テ薩埵山八幡平油丹



蒲原邊ニ陣ス信玄山懸三郎兵衛ヲシテ一千
五百余騎ヲ加ヘ駿府ノ城ヲ守ラシメ信玄二万
八千余騎ヲ率テ奥津河原ニ屯シ北条父子ト

對陣ス

廿日今川氏真使ヲ久野八左衛門カ宅ニ遣テ云
明夜吾レ兵ヲ出シテ 大神君ト戰ハシテ時同姓共
路守宗益同依渡守宗憲同彈正忠宗政同采女同
將監等ト相議テ汝等 大神君ノ後軍ヲ襲ヘ
ト謀ル久野一族等是ヲ諾ス去年久野三郎左エ

門尉宗能 大神君ニ來謁テ軍忠ヲ尽サント欲ス
大神君厚ク是ヲ賞シ玉フ弟於路守叔父彈正采女
共ニ志ヲ 大神君ニ通ス氏真カ使ニ依テ志ヲ變
テ宗能ヲ殺テ 大神君ヲ伺ント欲ス

廿一日氏真重テ阿丹守四郎ヲシテ久野八左衛門
尉カ館ニ赴カシメ締約ヲ堅ク定ントスト云ヘ凡ハ
左衛門尉信ヲ變テ^{謀テ}阿丹ヲ擒ニシテ是ヲ宗能ニ告
廿二日宗能 大神君ノ御營中ニ入テ氏真カ密謀ヲ達
大神君兵ヲ元テ宗能ヲ救ハシメ玉フ宗能カヲ得テ

淡路守ヲ殺シ彈心采女ヲ逐フ此夜掛川ノ兵果シ
テ大神君ノ陣ヲ襲フ大神君豫メ是ヲ知リ玉フ
ニ依テ伏兵ヲ設ケ玉フ敵ノ来ルニ及テ大須賀康高
大久保忠世松平忠次本多康重松平家忠水野忠
重等伏シ各テ戦ヒ敵ヲ追ヒ走ラシム

廿三日前夜ヨリ今日ニ至ルニテ御味方ノ軍士掛川ノ
城外ニ戦フ城兵日根野備中守弟日根野弥次右
衛門尉同弥吉郎拒キ戦フ松平左近將監忠次
カ從士岡田竹右衛門尉石川新兵衛尉左右田平

等槍ヲ合スル大久保次右衛門尉忠佐近松丹波守
ヲ討ツ水野惣兵衛尉忠重大谷七十郎ヲ撃テ
水野太郎作日根野弥吉ヲ討ツ内藤四郎左衛門
尉小坂新助等敵ヲ討テ首級ヲ得タリ松平左近
直乘松平主殿助伊忠渡辺羊藏等先鋒ニ進テ
軍功ヲ尽ス日根野備中守カ從士伊藤武兵衛尉
先隊ニ進ム水野忠重是ト戦テ遂ニ伊藤ヲ突キ
伏セ首ヲ得ント欲ス干時棕原次右衛門尉馳セ来
テ此首ヲ忠重ニ請フ忠重許シテ伊藤カ頸ヲ

棕原ニ讓ル棕原此首ヲ得テ 大神君ニ獻シ已
カ功トス御味方ノ兵林藤左衛門尉加藤孫次
郎松下新助小林勝之助奮戰テ死ス。

二月大

十五日 大神君兵ヲ引テ見付ニ入り玉フテ時士卒
ヲシテ堅ク四方ノ砦ヲ守ラシメ玉フ河田村ノ砦ハ
三州ノ兵交ニ是ヲ守ル久野宗能ハ久野ヲ守ル
小笠原与八郎ハ曾我山ヲ守ル

三月大

四日 大神君兵ヲ掛川ニ出シ玉フ

五日 大神君ノ兵掛川ノ城ヲ攻撃ツツ本多平八郎
忠勝松平主殿助伊忠先陣ス朝比奈備中守三浦
監物城中ヨリ出張ニ拒キ戰フ主殿助伊忠カ從
卒石原十郎大守ノ門外ニシテ城兵ヲ射ル其敵
末馬ヨリ不落ノ間ニ二ノ箭ヲ射付ル敵遂ニ馬
ヨリニ落テ死ス朝比奈三浦石原カ弓勢カ大ニシテ
其速ナル事ヲ褒美シテ軍畢テ後其箭前ヲ
金ノ團扇ニ載セ主殿助伊忠カ陣ニ送ル菅沼

三九郎城兵笠原七郎兵衛尉ヲ討ツ大なる三
弥小谷小助ヲ討ツ中山是非之助伊藤左近
ヲ討ツ松下加兵衛尉菅沼帶カヲ討ツ高橋
傳七郎朝比奈小三郎ヲ討ツ此余伊藤治部
大捕同掃部助等今川家ノ兵百余人戦死ス
御味方ノ軍士命ヲ殞ス者六十余人
今川カ属兵數艘ノ船ニ乗シテ掛塚湊ニ著ク
大瀬賀五郎左エ門尉康高柳原小平太原政
居彦右衛門元忠ニ命シテ是ヲ撃テシメ玉フ翌

日人ヲシテ掛塚湊ヲ見セシメ玉フ敵皆去ル
大沢左衛門佐堀江城ノ據ル鈴木石見守菅
沼次郎右衛門尉近藤登之助ニ命テ是ヲ攻
サシメ玉フ

四月小

十二日大沢左衛門作大神君ニ降テ麾下ニ属
ス依之大神君本領ヲ大沢ニ賜ル大神君御
使ヲ氏真カ臣小倉内藏助カ許ニ遣ハシメ
玉テ命有テ曰我レ幼年ノ昔今川家ノ助

成ラ得ル今テ是ヲ不忘故ニ氏真ト兵ヲ繕フ
事我カ本意ニ非スト云ヘ氏説者屢具文好
ヲ隔ル間無為方鉾楯ニ及フ遠州ヲ一圍ニ
吾ニ属セシメハ氏真ト文和ヲ結ヒ末代ニ於テ
聊モ踈意アルニシキノ旨ヲ誓言テ北条氏康ト
議シテ謀ヲ回ラシ武田信玄カ取ル所ノ駿府
ノ城ヲ奪返テ再ヒ府ノ城ヘ氏真ヲ奉居ナ
ラシムヘキ旨ヲ説カシメ玉フ小倉大ニ悦テ則チ
旨ヲ氏真ニ達ス氏真是ヲ諾ス依之小倉君

大神君ノ御陣營ニ来テ誓言約シ遂ニ文和成ル

五月大

六日今川氏真掛川ノ城ヲ 大神君ニ獻シ遠州
掛塚ニ航シテ相州小田原ニ赴ク北条氏康ハ
諫カ兵ヲ遠州ニ遣シ氏真ヲ迎ル 大神君松
平紀伊守家忠ヲシテ是ヲ送ラシメ玉フ家忠
豆州戸倉ニ至テ氏真ヲ送ル此処ヨリ歸ル
大神君金谷大井川辺ヲ巡見シ玉フ武田カ巨山
懸三郎兵衛尉味方ノ兵微勢カナルヲ見テ約ヲ

変テ 大神君ノ後軍ヲ籠メテ御味方ノ兵及
馳セテ敵ヲ討走ラシム是ヨリ 大神君信玄ト
怨ヲ結ヒ玉フ 大神君氏真カ臣小倉内藏助
ヲシテ北条氏康カ許ニ遣シメ玉ヒ駿府ノ城ヲ守
ル武田カ兵ヲ追ヒ退ク氏真府ノ城ニ本居ナ
ラシマン謀ヲ議シ玉フ氏真是ヲ諾ス 大神君石
川日向守家成ヲシテ掛川ノ城ヲ守ラシメ玉フ甲州ノ
兵屢掛川ノ城ヲ伺フ依テ援兵ヲシテ松平玄蕃
頭清宗清宗ハ家成カ智也ヲ掛川ノ城ニ加ヘ守ラシメ玉フ清宗

且釣命ヲ奉テ遠州日坂ノ辺塩井原ヲ守軍功ヲ及ス
故ニ大神君其功ヲ褒セラレ遠州上張村菅谷村
亀田村ヲ清宗ニ賜ル北条氏康薩埵山ニ陣テ武田
信玄ト屢戦ヲ挑ム時ニ 大神君其弊ニ乘シテ兵
ヲ駿州ニ送リ玉ヒ府ノ城ヲ守ル山懸三郎兵衛尉ヲ
攻撃シト謀リ玉山懸城ヲ守ル莫ク不得府ノ城ヲ
弃テ免レ去ル信玄是ヲ聞テ前ニ北条カ多勢ニ
向テ後ニ又強敵ノ 大神君ヲ受テ其戦ヒ危カラ
ン莫ク慮リ兵ヲ収テ甲州ニ歸ル依之氏康蒲原

ノ城ハ北条新三郎大宮神田屋敷ハ北条陸奥守善
徳寺ノ城ハ大藤元近右衛門尉其余興國寺中窪
葦山新保深沢山中十余ヶ所ノ城ニ兵ヲ留テ是
ヲ守ラシメ軍ヲ引テ小田原ニ帰ル 大神君ノ武威
ニ依テ今川氏真再ニ駿府ノ城ニ入り入ルト云ヘ凡
城中皆焦土ト成テ暫時モ在城ニ難シ故ニ氏真
赤川日向守小倉内藏助ヲ奉行トシテ府ノ城ヲ修
造ス此間氏真豆州戸倉ノ城ニ在リ其後岡部次郎
左門尉正綱同姓治部左門尉二人赤河小倉ニ代テ府
ニ往ク

六月大

ノ城ノ経営ヲ監ス故ニ赤川小倉等ハ駿府ヲ去テ戸倉
大神君兵ヲ送テ遠州天方ノ城ヲ攻撃シシメ玉フ柳原
康政先陣ノ命ヲ奉テ二ノ曲輪ヲ破リ進テ本城ヲ拔
キト敵ス千時守將山内山城守降ラ 大神君ニシテ是
ヲ許シ玉フ同州飯田ノ城ヲ攻テ是ヲ拔シテ城主山
内大和守ヲ殺シ從卒ヲ悉ク斬ラシメ玉フ

八月小

廿八日此春今川氏真久野宗純ヲ強テ招クト云ハ凡是
ニ不從 大神君ノ麾下ニ屬シテ軍忠ヲ尽ス
大神君其忠功ヲ悦ビ至テ彼カ一族等没収ノ地ヲ以テ宗
能ニ賜ル

家川同名所路守同彈正并采女依知リし事
右今度得之文能企通至宗純世別義方左以
忠高也此有為其賞得証職知リト一書出宗派
之有亦遠回心者凡有世世臣モ如存ト下
分々言被回心者能近江ノ守海軍ト也仍少件

永祿十二己巳

八月廿六日

家原

久野三島正房

九月六

松平玄蕃頭清宗石川日向守泉成ニ加テ掛川ノ城ヲ守
ルト云ハ凡其後 大神君ノ命ヲ奉テ清宗塩井原ノ
若ヲ守ル依之松平衣込直乘ヲ掛川ノ城ノ援兵トシ
テ遣ハシメ至テ干時 大神君御書ヲ直乘ニ賜ル
掛川番守シ及兼日泉守ハハハハノ右義入ト共

壬辰廿日掛川道に兵ありて境目より少く一刻
十河以急に之を降す

九月廿六日

家康

壬午九月廿六日

武田信玄駿州を略し府人城ヲ得テ山懸三郎兵衛尉
ヲシテ暫時之ヲ守ラシムルト云へ凡 大神君ノ密武
略ニ因テ幾程ヲク府人城ヲ被追出是ヲ信玄大憤
テ相州小田原軍ヲ築シ北条氏康ヲ退治シテ後進
テ駿州ヲ退治シテ攻入り再ニ府人城ヲ奪ヒ返サント

欲シテ相州に進發シ小田原城下ヲ放火ス

十月小

六日信玄兵ヲ救テ小田原ヨリ甲州ニ歸ル同八日信玄
氏康カ兵ト相州三増ニ戦フ駿州及ヒ豆州ノ數城
ヲ守ル北条氏康カ部将等信玄相州ニ攻入ルノ告
ヲ聞テ是ヲ拒シ為己レカ守ル所ノ城ヲ弃テ各小
田原ノ城ニ歸ル集ル北条新三郎獨蒲原ノ城ヲ守
テ不去

十一月大

五日武田信玄甲州ヲ発シ相駿豆州ニ軍ヲ出シ武威
振フ

十二月小

六日信玄駿府ノ城ヲ攻メテ蒲原ノ城下ヲ過ル
于時北条新三郎蒲原ノ城中ヨリ兵ヲ發テ武田カ多
勢ト戦テ利ヲ得ル蒲原城中ニ内應ノ者有テ其
時武田カ勢ヲ城後ノ山ヨリ城中ニ引入ル依之北条
新三郎内外ノ敵拒ク事ヲ不得奮戦テ遂ニ死ス
從兵七百余人皆戦死ス

七日信玄進テ駿府ノ城ヲ攻撃スツ氏真カ臣岡部右衛門
尉ヲ始テ五十余人府ノ城ヲ守テ是ヲ拒クノ間城陷ラ
ス信玄是ヲ謀テ鉄山和尚ヲシテ和ヲ岡部ニ請テ云
府ノ城ヲ避ケ渡シテ我レニ属セハ岡部次郎右衛門兄
第乃ニ城ニ籠ル所ノ諸士皆以加賜之地三十倍ヲ可
行ノ旨ヲ説カシム城兵各此旨ニ應テ信玄ニ降テ遂ニ
府ノ城ヲ避渡ス

十三日 大神君遠州榛原郡ノ内吉永西島幸玉殿
窪星窪柏原及山川舟市山梨二千貫ノ地ヲ松平九

近直業ニ賜ル

元龜元年庚午

三月大

遠州濱松ノ城嘗構既ニ成テ 大神君是ニ移リ玉フ三
州岡寄ノ城ヲ以テ信康ニ譲リ玉フ

廿一日今川氏真カ臣小原肥前守カ男三浦右衛門作
山西花沢ノ城ヲ守ル信玄謀テ是ヲ招クト云ヘ凡小原
父子忠義ヲ守テ信玄ニ不從城ヲ弥固守リ信玄軍

ヲ登テ城ヲ圍メハ是ト拒キ戰テ雌雄ヲ決セント欲ス
依之信玄兵ヲ花沢ノ城ニ突ス案内者タルニ依テ岡部
次郎右衛門尉正綱ヲ以テ先隊トシテ城ヲ圍ミ攻撃ツ守
將小原カ甥小原源之丞同姓權右衛門尉及ヒ井伊弥左郎
松森豊三郎等城中ヨリ出張シテ奮戰ト云ヘ凡甲兵
多勢進テ競ヒ攻ノ間遂ニ花沢ノ城陥ル今川家ノ
同朋伊丹權河弥屢城中ヨリ進テ寄手ノ兵ヲ追ヒ退
ソケ勇ヲ震フ信玄彼カ武勇ヲ感ス花沢ノ城落去
後權河弥ヲ
招テ從者トシ後ニ伊丹大隅
守ト号シテ海賊ノ長トス小原肥前守父子花沢ノ城ヲ出

奔シテ遠州高天神ノ城ニ遁レ去ル高天神ノ城主小笠原與八郎ハ連年小原ト文好ノ友也依之小原妻子ヲ推テ高天神ノ城ニ往テ小笠原子八郎ニ因テ

大神君ノ麾下ニ屬セシ事ヲ請フ与八郎謀テ小原又

子ヲ殺シ大神君ニ獻ス

大神君ト氏真不快ノ復小原父子カ所為ナク由大神君彼レヲ惡シテ

夫郎兼テ是ヲ聞ニ依テ小原父子ヲ殺サ大神君ノ御旨ニ應シテ思慮シテ忽旧友ノ信ヲ變シテ遂ニ小原父子ヲ殺スモノナリ

雖然大神君小笠原カ朋友ノ文ヲ弃テ是ヲ殺ス事

其情ナキノ由命有テ敢テ是ヲ不悅給

今川氏真駿府ノ城ヲ守ラシムル家臣等カ逆意ニ因テ

府ノ城ヲ再ヒ信玄ニ奪ヒ取ラレ僅ニ免レテ相州小田

原ニ至テ北条氏康ニ因テ寓居ス氏康是ヲ憐テ相

州早河ニ新ニ宅地ヲ終シテ氏真ヲ是ニ居ラシム

世人氏真ヲ呼テ早河ト称ス

二月大

織田信長朝倉君義景ヲ征セント欲シテ援兵ヲ

大神君ニ請フ大神君是ヲ諾シ玉フ浅井下野守久政

カ男備前守長政信長ニ組シテ志ヲ通ス信長ハ直ニ

江州ヲ過テ越前ニ入ラント欲ス

三月小

七日大神君遠州ノ兵ヲ卒テ岡崎ヲ御進發信長ヲ援テ

四月大

廿日織田信長兵ヲ越前ノ国ニ發ス近江路ヨリ若州
ヲ經テ熊川ニ至リ松宮玄蕃允カ館ニ宿ス

廿三日信長依梯ニ至テ粟屋越中守カ宅ニ宿ス

廿五日信長越前国敦賀ヲ出テ進テ手筒山ノ城ヲ

攻ム柴田修理亮勝家木下藤吉郎秀吉池田勝三

郎信輝等城ヲ圍テ攻撃テツ大神君信長ヲ援給

ハシカ為メ師ヲ帥テ來會シ玉フ大神君信長ノ兵ヲ
并テ競ヒ掛テ奮撃テツ手筒山ノ城遂ニ陥ル

大神君及ヒ信長ノ兵士等首ヲ得ルテ千三百七十余級

廿六日大神君及ヒ信長兵ヲ發テ金ヶ崎ノ城ヲ圍メシ玉

廿七日大神君信長兩將ノ兵追テ搦手一同ニ發テ即

時ニ城ヲ拔ント欲ス干時信長ノ陣ニ脚カ來テ淺井

備前守長政信ヲ變テ逆意ヲ企兵ヲ江州ニ起シ

信長ノ軍ノ後ヲ要ルノ由ヲ告ル信長聞テ大ニ驚キ

夜ニ入り圍ヲ解テ金ヶ崎ヲ去ル木下藤吉郎秀

吉ヲ後拒トシテ朝倉君カ勢
依テ大神君秀吉ヲ救玉
多勢競来テ秀吉ヲ追
是ヲ拒ク大神君自ラ火炮ヲ
晦日信長朽木越ヲ経テ

五月大

九日信長暇ヲ義昭ニ告ニ
十八日大神君岡崎ニ歸リ
テ又援兵ヲ大神君ニ拜

廿一日信長岐阜ニ入ル

六月大

四日浅井備前守長政江
攝テ信長ヲ救ク
十九日信長兵ヲ卒テ浅
城ヲ拔ク
廿一日信長兵ヲ進メテ浅
佐久間信盛カ諫ニ因テ城
廿二日信長軍ヲ返ス時

ヲ押ヘシム秀吉微勢タルニ
漸ク若州ニ至ルノ時敵ノ
大神君ノ兵軍ヲ返シテ
取テ怨敵ヲ拒キ玉テ故敵退
入洛ス

出京シ江州千草越ニ赴ク
玉テ信長浅井ヲ撃テト欲
雨フ

北長比苜安兩所ニ要害ヲ

并郡ニ進兵シ長比苜安兩

并長政カ城小谷ニ至ルト云
ヲ攻ル者ヲ止メ軍ヲ退ト欲
浅井カ兵是ヲ追フ信長ノ

軍士能ク拒クニ因テ敵遂ニ退去ル信長又軍ヲ發テ
横山ノ城ヲ攻ム守將淺井カ家又大野木土佐守三田村
左衛門尉野村肥後守微勢カタルニ因テ淺井ニ援兵ヲ
乞フ淺井亦使テ越前ニ發テ朝倉君義景ニ後援ヲ乞
フ義景是ヲ諾テ朝倉孫三郎ニ一萬余騎ノ兵ヲ加
ヘテ横山ノ城ニ赴カシム

廿六日大神君五千余騎ノ軍士ヲ卒テ信長カ江ノ陣
ニ來會シ玉フ此日淺井備前守長政其父下野^守久政越前
ノ援兵ヲ并テ野村三田村ニ陣ス

廿七日信長諸將ト戰ノ謀ヲ議シテ軍列ヲ定ム越前
ノ兵ニ向ハシムルノ一陳柴田勝家及ヒ明知光秀ニ陣
ハ大神君ニ陣ハ稻葉一鉄朝倉カ兵ニ向ハシムルノ軍
勢一陣ハ坂井右近ニ陣ハ池田信輝亦丹羽五郎
左衛門尉長秀ヲシテ横山ノ城ヲ押ヘシム于時
大神君ノ曰淺井朝倉君兩兵ノ中強カラシ敵ノ先鋒
ニ向ヒ戰ハシ後陣ニ有シ支本意ニアラサレノ由ヲ
請玉フニ因テ信長此旨ニ從ヒ大神君^兵先隊トシ
テ朝倉カ陣ニ向ヒ玉フ其兵五千余騎然レテ

大神君、微勢カ朝倉、大軍タルニ依テ信長ノ云ク
誰ヲ以テ加勢トセシヤ、大神君稻葉伊予守ヲ請
玉フ信長是ヲ諾ス伊予守名譽ノ士、大神君望
ニ依テ後陣ニ加ルヘシト信長是ヲ美称ス則稻葉御
陣ニ加ル

廿八日信長東方ニ陣ニテ浅井ニ向テ軍ヲ分ツ莫
十三列トス坂井右近一隊タリ池田信輝木下秀
吉是ニ次ク、大神君、西方ニ陣ニ朝倉君カ勢カニ
向ヒ玉フ黎明朝倉君カ兵姉川ヲ渡テ、大神君ノ

軍勢ト戦フ本多平八郎忠勝大久保治部大輔忠
隣一隊ニ進ム酒井左衛門尉忠次榊原小平太原政
松平主殿助伊忠小笠原左八郎二隊ニ備ル三隊ハ
大神君ノ御本陣也御味方ノ軍勢カ進ミ戦フ朝
倉君カ兵大ニ敗ス虎御前山ニテ是ヲ追討ツ榊原
康政カ戦ミテ歿ラ蒙ル敵ノ兵二人味方ノ軍士ニ
交リ来テ、大神君ヲ伺フ此敵一人ハ天野三郎兵
衛尉康景組撃テ死ス一人ハ加藤喜克衛門尉是
ヲ殺ス東方ノ軍浅井カ先鋒磯野丹波守秀

昌進ミ来テ坂井右近ト戦フ坂井カ兵敗亡シテ
多ク命ヲ殞ス池田信輝坂井ニ替テ磯野ト戦
フ池田モ亦利ヲ失テ退リ依之浅井カ軍執勝
ニ乘テ信長ノ本陣ヲ競ヒ撃テ信長ノ陣既ニ
危シ時ニ大神君信長ノ陣ヲ救玉ヒ自ラサイヲ
採テ士卒ヲ指揮シテ戦ハシナ玉フ士卒勇カニ進
テ奮撃ツ故浅井カ兵大ヒニ敗走ス大神君ノ兵
追フ古又太多急也信長ノ軍勢カ是ニカシ得テ北
ルヲ追討テ多ク首級ヲ得タリ稻葉伊予守兵

ヲ廻シ横ニ浅井カ陣ニ撃テ破ス浅井カ軍士遠藤
喜右衛門尉信長ヲ討ント伺フ信長ノ兵竹中久
作遠藤ヲ殺ス信長ノ軍勢カ敵ノ敗兵ヲ追テ小
谷ノ辺ニ至ル信長我カ兵ノ險路ニ陷ラシ夏ヲ察
テ士卒ニ下知シテ軍ヲ返サシム大神君及ヒ信長
ノ兵士等撃テ捕ノ首凡三千余級此日信長
大神君ノ戦功ヲ賞テ重器奇珍ヲ進ラセテ
書ヲ以テ是ヲ称テ云リ今日ノ大功勝テ言ヘ
カラス前代比倫ナシ後世誰カ雄ヲ争フ當家ノ

綱紀武川ノ棟梁也 大神君是ヲ辭テ三州ニ歸テ

八月六

廿一日暴雨烈風シテ遠三兩國ノ民屋多ク大破
廿八日大神君遠州濱松ノ城ニ於テ觀世宗雪
入道同左近大夫ヲ召テ終日猿樂アリ御家以
麻ニ近習外様ノ諸士城ニ登テ見物ス其外遠
三兩國ノ鄉民等群參シテ是ヲ見ル 大神君ノ
長男御元服有テ岡崎次郎二郎信康ト号シ五
五フ其賀儀トシテ猿樂アリ

九月小

十六日朝倉君義景淺井長政兵ヲ卒テ江州比叡山八王子
辺ニ出張ス

十九日信長、臣木三左衛門尉可成宇佐山ノ城ヨリ兵ヲ發テ
朝倉淺井ト迎戰テ木三遂ニ戰死ス

廿日義景長政宇佐山ノ城ヲ攻テ大津近辺ニ放火ス

廿一日義景長政燧ヲ醍醐山科辺ニ舉ルテ時信長ハ
想及ニ陣シテ野田福島ノ城ヲ攻ム

廿三日信長坂本ノ乱ヲ聞テ摂州ノ軍ヲ四能メテ義昭ト

共ニ帰陣ス

廿四日信長兵ヲ率テ江州ニ進發ス朝倉淺井カ兵皆
比叡山ニ登テ陣ス

廿五日信長諸將ヲシテ叡山ヲ圍メシム依久間信盛
稻葉伊予守密ニ叡山ノ老僧ヲ招テ信長ニ屬セシメ
シト謀ル僧徒等從ハズ信長檄ヲ飛シテ援兵ヲ
大神君ニ請フ大神君是ヲ諾シ玉テ石川日向守家成
酒井左衛門尉忠次松平主殿助伊忠奉多彦次郎康
重松平左近將監忠次等ヲ部將トシテ諸將ノ從卒

勇者二千人ヲ擇テ是ニ加ヘテ江州ニ赴カシメ玉フ不日ニ江
州勢田ニ至ル信長大ニ悦テ先ツ使ヲシテ其遠來ヲ勞テ
云ク朝倉カ兵ハ我レ是ヲ拒ク江州ノ兵蜂起シテ國中ニ
元満ニ往還トモニ絶ス勢田ト草津ノ間ニ陣シテ依メ
木カ勢ヲ推ク人キノ旨ヲ述ル三州ノ諸將此地ニ陣シテ
輕卒ヲ進メ日々ニ矢軍止ム時ナシ敵兵味方ノ微勢
ナラヌヲ侮テ四方ヨリ圍テ攻撃キツ度數回石川家成
酒井忠次松平伊忠先鋒ニ進ミ戰フ度二十余度ニシテ
遂ニ勇氣撓ハス山上ノ敵三州ノ兵ノ勇氣ヲ見テ

力尽テ和ヲ乞ヒ兵ヲ収テ越前ニ帰ル信長大ニ家成
忠次伊忠等カ武勇ヲ美称ス

十月六

三日相州小田原ノ城主北条氏康卒去ス五嗣其子北条
氏政武田信玄ト和平ヲ結フ父ノ氏康卒テ後氏政カ武
威衰ルノ故カ此年ノ冬十二月氏政カ北条助五郎同四
郎二人ヲ質トシテ甲州ニ赴カシム信玄氏政ト議テ兵ヲ相
州早川ニ発シ今川氏真ヲ殺サント謀ル氏真聞テ竊ニ早
川ヨリ船ニ乗テ遠州ニ漂泊シテ大神君ヲ憑ム大神君

先年ヨリ數回ノ御約諾有ニ依テ其美ヲ愛シ玉ハス氏真
ヲ助成シ玉テ聊モ踈意ナシ依之今川家ノ諸士

大神君寛仁ニシテ義アル者ヲ知テ其徳ニ化シ呼サル應
シ招カサルニ来テ大神君ノ麾下ニ属スル者多シ越後
ノ長尾輝席氏真ト入魂ノ好ニ有依之氏真カ口入トシ
テ大神君輝席ト文和成ル

元龜二年辛未

正月小

五日 大神君從五位上ニ叙シ玉フ
十日 大神君侍從ニ任シ玉フ

二月大

十六日 武田信玄兵ヲ卒テ甲州ヲ発シ駿州大宮ニ至テ滯
留スル夏三日ソレヨリ同国田中ノ城ニ赴ク

廿四日 信玄遠州小山ニ至リ能滿寺ノ要害ヲ修テ大熊
備前守ヲシテ是ヲ守ラシム

三月小

五日 信玄軍ヲ發テ遠州高天神ノ城ヲ攻撃シテ破ス

城主小笠原子八郎輕卒ヲ城外ニ進メテ是ヲ拒ク信玄此
城ヲ攻メハ我カ兵ノ多ク死セシ夏ヲ慮テ進テ城ヲ攻
ズ内藤修理亮ニ下知シテ郭外ニ出張スル輕兵等ヲ城
ニ追ヒ入シメ信玄師ヲ帥テ遠州乾ノ城ニ至リ掛川城
及ヒ久野ノ城ヲ巡視シテ軍ヲ信州伊奈ニ收ム

四月大

十五日 信玄兵ヲ信州ヨリ發テ足助ノ城ヲ攻メテ破ル城
主鈴木喜三郎城ヲ避テ退ク

七月大

廿五日遠及濱名ノ郷主 大神君ヲ敬キ志ヲ信玄ニ通
シテ濱名ノ郷ヲ去ル 大神君戸田三郎右衛門尉本多
百助ニ濱名ノ郷ヲ賜リ此所ノ上カノ兵ヲシテ戸田本多
兩人ニ附ケシメ玉フ

異本ニ 大神君三州岡崎ヨリ遠州濱松御入城御時
井伊谷三人遠州平山峠ニテ御迎ニ出奥山井伊谷御
導引羽輪妙音寺ニ御着坐其ヨリ普庵寺ニ御移リ
濱松御入城被遊候五島覺兵衛モ罷出御身方申候
濱名肥前守五島佐渡信玄ト一味仕不罷出候然處

大神君濱松御入城三年目見付今ノ浦上ノ聖若石御
築可被成トテ遠及兩國軍勢御寄被成候其時五
島佐渡罷出候乗打仕候トテ鉄炮ニテ御討セ候濱
名肥前守内縁之者内通ニテ申聞カセ候ハ先年濱
松御入城ノ節不罷出候ニ付今度佐渡守御討セ被成
候其方モ其御内心甚深ク御討セ可被成御容躰候
油断有間敷下申聞セ候ニ付早々御普請場ヨリ甲
州へ立退候ハ氏信玄モ御抱ヘナク上方へ落行ノ由ニ候

元龜三年壬申

閏正月小

十三日 大神君兵ヲ金谷大井川ノ邊ニ出シテ巡見シ至テ
還リ至テ酒井左衛門尉忠次小笠原与八郎等并呂カ
瀬ヲ涉テ島田河原ニ陣ス信玄約シ愛ヒテ

大神君兵ヲ大井川ニ出シ至テ衆ヲ責テ是ヨリ怨相怒
十九日 大神君兵ヲ收テ濱松ニ還リ至テ

十月小

十二日 信玄甲州ヲ發テ遠州ニ至リ天野宮内左衛門尉

ヲ案内者トシテ多々羅飯田ノ兩城ヲ攻テ是ヲ拔キ見付
ニ至テ陣ス 大神君ノ兵三千余騎一言坂ニ進ニ向テ本
多平八郎忠勝カ從士大氣彦一郎見付ノ所ニ放火シ
テ敵ヲ西北ニ廻シ御味方ノ兵既ニ進ニ撃テトス時
ニ本多平八郎忠勝内藤四郎左衛門尉ニ成

大神君ニ言テ云ク今日必ス戰フ事ナカレ速ニ軍ヲ返
サシメ至テハシ敵多勢ヲ卒テ進退自由ノ地利ニ陣
ス味方ハ且ツ微勢カニシテ地利宜シカラズ味方ノ陣
ヲ退ソケシニ敵若シ天龍川ヲ越テ追ヒ来テハ彼

レ河ヲ半涉ルノ時味方ノ軍ヲ返テ速ニ奮撃シ久其
利ヲ得シ莫掌ヲ指スカ如クナラント決ス。大神君是
ヲ許シ然リト云ヘ凡兩陣ノ間其近キ事僅ニ二反計
ニシテ味方ノ兵退ソカハ敵其動ニ乘テ競ヒ撃テ下
伺フ故ニ退ク莫シ得ス兩陣互ニ支ヘ挑ム本多忠
勝獨リ槍ヲ提ケ兩陣ノ間ニ馬ヲ乗入レ諸卒ニ
指揮シテ馳廻ル事七八度ニシテ遂ニ味方ノ陣ヲ
退カシム敵其勇勢ニ辟易シテ敢テ追フ古之ヲ不
得味方ノ軍勢カ三町余退キ去ル于時敵起テ是ヲ

追フ忠勝カ軍士櫻井庄之助三浦竹藏大原作右衛
門尉柴田五郎左門尉等軍ヲ返テ奪戦フ武田
カ兵猶進テ競ヒ追フ本多平八郎忠勝内藤三
左衛門尉大久保七郎右衛門尉忠世等殿後シ兵ヲ全
ニテ濱松ニ歸ル武田信玄カ男勝頼兵ヲ卒テ二股
ノ城ヲ攻ム。大神君是ヲ救ヒ玉ハシカ為メ軍ヲ出シテ
天竜川ニ屯シ玉ヲ勝頼ニ股ノ城ヲ下シテ依田下野
守ヲシテ是ヲ守ラシム東三河ノ士皆信ヲ愛テ武
田ニ屬ス菅沼次郎右衛門尉同新八郎忠ヲ愛セ

ス野田ノ城ヲ守ル

廿七日遠州宇津山ノ砦、當時武田カ兵其地ニ陣
シテ通路ヲ絶 大神君勇將ヲシテ此砦ヲ守ラ
シメント歎シ王ヲ諸將猶豫ス於友松平備後守清
善家督ヲ嫡子清宗ニ譲テ迄未隱居スト云
ハ氏請テ宇津山ノ砦ニ赴リ 大神君其勇功ヲ
悦ヒ王ヲ是ヲ賞テ遠州支長村ヲ貫ノ地ヲ清善
ニ賜ル

々々亦宇津山ノ相好ノ事ニ夜忌ハあり子

其文ニ地ヲ守ルノ事ニ在リ

二文あり

十月廿七日

家康

右平伍後々々

十一月大

尾州援兵之同信盛瀧川一益平千等濱松ニ至

十二月大

廿二日武田信玄兵四万余騎ヲ率テ陣ヲ遠州三
方ヶ原ニ張ル 大神君尾州ノ援兵ヲ并テ八千余騎

進テ戦ニト欲シ玉フ信玄尾州ノ援兵ヲ聞テ猶
豫シテ戦ハス既ニ其日申ノ尅ニ及フ時ニ

大神君ノ先隊ノ兵士等競ヒ進テ武田カ兵ト戦
フ敵ノ先隊一二ノ陣ヲ破ルト云ヘ氏勝事ヲ得ス
利ヲ失テ敗ス敵勝ニ棄テ頻ニ是ヲ追討ツ

大神君ノ陣危急也干時夏目次郎左衛門尉獨リ
返ニ合セ奮戦テ忠死ス其余本多肥後守忠貞成
瀬藤藏鳥居四郎左衛門尉神原振津守岩堀勘
解由九門尉父子河澄源五郎加藤九郎天野夾右

衛門尉米津小太夫安藤左助大久保新藏渡辺
新九郎渡辺十右衛門等三百余人戦死ス

大神君濱松ノ城ニ退キ玉フ

其夜信玄犀カカケニ比ス天野三郎兵衛尉康景
大久保七郎右衛門尉忠世ト議テ輕卒ヲシテ僅ニ
火炮十六挺ヲ持タシメ信玄カ陣スル犀カカケニ
進メテ不意ニ起テ火炮ヲ放サシメ穴山陸奥守
カ陣ヲ襲ヒ攻ム武田カ兵驚キ騷テ犀カカケニ
敗シ落テ死スル者數千人

廿三日黎明信玄兵ヲ引テ同国刑部ニ退キ此所
ニシテ越年ス

異本ニ元龜三壬申年十二月廿二日甲州武田信玄遠
州三方ヶ原へ出ル 家康公三方ヶ原グイボサツ
ニ御備ヲ出サル織田信長公ヨリ加勢カトシテ平手
監物水野下野守 佐渡守佐久間右衛門大垣
全毛利河内守瀧川伊予守稻葉伊予守安藤伊
賀守後口伊賀守九領新居本坂陣入信玄味方
ノ大軍ヲ聞合戦有間敷ト遠慮ス 家康公海

道一番ノ弓取ト云ヘ凡我朝若手ノ武士其上信長
ヨリ加勢有ケレハ一戦ニ利得候トモ大河大坂ヲ越テ
引取又アヤウカルヘシトテ形部へ通ントス此時濱
松勢合戦ヲ始ントス鳥居四郎左衛門物見ヨリ帰
リ今日ノ軍シカルヘカラス其故敵ハ段々ニ備ヲ一ウ
ケ堅陣張申候味方ハ山キワニ只一重ニテ危シ先
手ヲ早々御引取候ヘト申 家康公御立腹被
成今日ノ合戦ヲ止ル莫汝日頃ニ違ヒヨクシタルヤ
ト被仰四郎左衛門申上ルハ私ノ剛臆ハ美ハ指置

申候勝負ノ善悪考へ軍ヲ被成可然候若是
非合戦ト思召候ハ、畝堀田ノ方へ押行時分ヲ考
へ被成御合戦候ハ、可然由申上ル時成瀬藤藏
申ケル、御合戦ヲ初レ戦ヒ負候ハ、討死仕候
ニコソ侍ノ本意ニテ候トテ合戦進ム方ノ北へ合
戦初リテ討死ス渡辺半蔵モ物見ヨリ帰テ御合
戦ヲ止ル処ニ大久保七郎右衛門柴田七九郎合戦ヲ
初メントス武田信玄ハ山キワ迄引トラントスル処ニ小
山田兵衛カ内上原能登キヨイカ谷ヨリ合戦ノ勝

負ヲ見積申処其利故先陣ヲ小山田ニ云付ラレ
申ノ刻ヨリ合戦始ム小山田ト石川伯孝ト相戦石
川カ兵外山小作一番ニ槍ヲ仕ル 家康公御旗本
ヲ以テ山縣三郎兵衛カ三百余騎ヲ三町追立ニル
酒井左衛門尉忠次柳原小平太康政大久保七郎右
衛門忠世横ニ掛テ山家三方作手段峯長篠ヲ云
ク切崩ス甲兵勝頼又山縣キヨリ横ニ掛ル武田九
馬久穴山梅雪勝頼ニ續テ濱松勢ヲ追崩ス信
玄下知ヲ以テ小荷駄奉行耳利カ勢ヲ横ニ入ル

依之信長ノ執平于監物討死也信玄軍ノ利ヲ
得ラルト云へ氏瀆松勢ノ剛強ヲ模造照備ヲ
先ヘクリ捨カ、リヲ燒テ用心ス榊原小平太八味
方破軍ナレ共退カズ後ニ城東郡ノ方西島ヘ引
退テ此合戦ニ味方本多肥後守忠真鳥居四郎
左衛門忠度岩城勘之由父子加藤次郎九郎松平
彌右衛門同銀丞天野藤右衛門榊原根津青木
又四郎中根平右衛門川澄源五郎渡辺十右衛門
同新九郎成瀬藤藏米津小太夫松平弘右衛門川

井八郎兵衛松浦吉兵衛石川半三郎等三百余人討
死ス 家康公労兵ヲ集テ獨敵ニ向ント被成復
目次郎左衛門参り大將ノ命ヲ全シテ軍ヲ引ト云
事有トテ御馬ノ口ヲ取テ味方ノ陣ノ方ヘ向テ槍
ノ石突ニテ御馬ヲタ、キ向テ如何様ニモ不恐某
御名乗ヲ玉リ 家康ト名乗可討死ト申上
家康云ノ御馬ノ口ヲ城方ヘ向テ三途ヲ行此時退
キ至テ次郎左衛門五十五歳与カ廿四五騎引廻テ勢
慕来ル敵二人十文字ノ槍ニテ突テ死ス廿四五騎

ノ者共不残討死ス即引取被成候ヲ敵急ニ追掛
奉ル時ニ鳥居彦右衛門元忠取テ返シ身命ヲ
惜ニス戦フニ信玄ノ旗本ヨリ放ツ矢彦右衛門カ
鞍ノ前輪ヨリ踏所ヲ射レテ手負テ引退リ渡
辺半藏ハ玄點口ヲ堅ナテ防キ戦フ渡辺半十郎
勝屋甚五兵衛櫻井庄之助甚五兵衛ニ首ヲ取
ラスル石川伯耆守康昌ミツハライシテ味方ヲ引
上ル家康公ハ和路ノ方林ヲ御見當ニ御引玉ヲ信
玄勢ハ城ヲ見當ニ押掛ル城ノ北ニ屏カガケ有リ

不知押勢ガケテハ落大勢死ス家康公ハ和路ヨリ
井場へ御下リ其ヨリ南口通り御城東ノ下タレ口
ノ御門ヨリ御入被成候夜ニ入石川ト大久保七郎右
門天野三郎兵衛二人下知ラ以テ銃炮ヲ強クウツ
シノテ敵ヲ掃フ亦天野三郎兵衛ト大久保七郎左
門兩人味方勇兵ノ中ヨリ銃炮十六挺振ヒツレテ出テ
信玄ノ野陣屏カケノ邊へお掛ル甲兵アハテフタ
メク明レハ廿三日ノ朝濱松ヨリ三方原へ且輕ヲ出
サレ銃炮ヲ討掛サセラル其日甲兵押ハハ穴山梅

雪成故在任大學穗坂常陸乃追掛采ルト云ハ氏
鉦炮ニ打立ラレテ引退ク爰ニテ敵ノ首五ツヲ
得タリ信玄ノ刑部村ノ上原ニ野陣ヲ取越年祿
申候是ヨリ三州野田ハ祿通菅沼新八郎ノ城ヲ
攻被申候

家忠日記增補卷之四終

